

ごぜやど
警女宿再現
—警女唄伝承運動の意義と現状—

板垣俊一

1 黒崎町木場新田での試み

去る五月二十六日、黒崎町の民家で警女宿を再現するというユニークな試みが行なわれた。これを企画したのは木場新田にお住まいの丸山和五郎さんである。

丸山さんのお宅もかつて警女宿だったという。しかも氏は、子供のころ、「おらうちに警女きたすけ、うた聞きに来てくらっしえ」と近隣を触れ回った経験のあるお方で、この春、新潟にも新しい警女唄伝承者が誕生しつつあることを知り、何とか昔の警女宿を再現して古き良き文化を伝えて行きたいとの思いから、ご自宅を提供してさっそくこの催しを行なったのである。

当日は町のさまざまな行事と重なり、参加者の減少が危惧されたが、それでも始めてみると百人を越える人々で、さすがの大座敷も満員の状態だった。もと警女小林ハルさんの記憶によれば、この地域の人々は段物が好きで、続きが聞きたいから二晩でも三晩でも泊まって行けと言われた所だという。その日の会場は、そんな土地柄が今でも残っていると感じさせる雰囲気だった。

当日の出し物は、警女唄の段物が萱森直子演奏による『石童丸』二の段、三の段。これを中心に、地元の芸達者な方々による民謡と新作舞踊が加わり、なかなか華やかであった。こうした、とりわけ村人参加型の楽しみ方は、かつての警女宿を思わせるものがあり、夜でなく日中に行なわれた点を別にすれば、この日の催しはまさに警女宿の再現とっていいものだった。



写真1 萱森さんの唄に聴き入る黒崎の人々
(1996.5 木場新田の警女宿再現の会場で)

いたがき しゅんいち

〒951 新潟市関屋堀割町1-2 ヴィラ関水30C (自宅)
ごぜ唄四季の会 (025-270-7383)

2 民俗芸能としての警女唄

昔は、村に入ってその日の宿を定めた警女たちは、そこに荷物を置いて、三味線だけを手にして村中を門付けに廻ったという。警女のいなくなった今、「門付け」の語はもはや死語となったし、もしそれを今真似ても酔狂でしかないだろう。だから、警女宿の再現とは言っても、すべて昔のままに再現できるわけではない。

しかしながら、警女たちが残した門付け唄の文句には、門付けの持っていた民俗的観念がこめられており、その唄の伝承と受容を通しておのずからその観念もまた受容され伝承される可能性があるだろう。そこに民俗芸能としての警女唄のあり方がある。

ちなみにここで想定している門付けの民俗的観念とは、おおむね次のようなことである。すなわち警女たちの巡業が、年ごとに各戸を訪れて祝福を与える来訪神の役割に擬えられたことである。門付けの唄の文句は様々あるけれども、例えばこの観念にふさわしい例をあげれば、いずれも祝福の文句を含む新春のことはぎであるが、『警女松坂』の、

へ あら玉の 年の始めに 筆とり染めて
よろずの宝を かきとめる

あるいは『警女万歳』の、

へ 春のはじめの 目出度さは 鶴よ亀よ 知行重ねて
おんとく若には ご万歳とは 君に榮えておわします
……

などの文句である。

この上さらに、警女笠を被り、杖を手に、三人五人と列をなして歩く盲女たちの姿は、どう見ても異形のものたちであり、それゆえに彼女たちの祝福の詞には威力があると信じられたものと思われる。今日もはやその姿は見られなくなったが、目明きの伝承者が人々の前でこのような門付け唄を歌う場合でも、その座の人々にとっては遠来の旅人を迎えて祝福を受けるという形に違いはなく、前述の民俗的観念が消失するわけではない。そして、このような観念が少しでもあるかぎり、本物の警女のもとから離れても警女唄は民俗芸能だと言えるだろう。

また、警女唄は本来端座して聴くものではない。各地の祭礼の中で演じられる多くの民俗芸能に見られるように、警女唄もまた多少猥雑な要素を含んでいる。それは、祭礼がハレの日であると同じく、警女唄の集いも日を定めないハレの日だったからである。かつて警女宿に集まった人々はほとんどが顔見知りの村人たちであり、いつもは日々の労働に明け暮れていた人々の束の間の憩いの場だったと想像される。警女

たちの巡業は芝居の一行のように大掛かりではなく、三人程度でやってきて村の瞽女宿にハレの場を作り上げることができた。現今では家族構成の変化や住宅事情によって、伝統的な民家の間取りが消えつつあるために、個人の家で瞽女宿を再現することはきわめて困難であり、大方は地区の公民館などが会場とならざるを得ない。そのために瞽女唄の「演奏会」になってしまう傾向があるけれども、本来瞽女唄の持っていた民俗芸能としての魅力を少しでも保ってゆきたいと思う。

瞽女唄伝承の危機の中でも、唄にとって幸いだと思うのは、いまだ各地に「聴く耳」をお持ちの年配者たちが健在であることである。どんな芸能も演じ手や歌手だけでは育たない。観客や聴衆がそれを育てるのである。とりわけ民俗芸能としての魅力は、どこまでも民衆の中で鍛えられるものでなければならぬ。

さらにもうひとつ瞽女唄にとって幸いなことは、永年にわたって瞽女たちが磨き上げてきた唄の内容が、今日においても決して古びたものではないという点である。音曲的な方面は置いて、段物の数々の物語的な面白さは自信を持って請け合うことができる。『葛の葉子別れ』をはじめ『山椒太夫』『石童丸』などは皆古い物語ではあるが、いずれも永遠に滅びることのない親子の愛情の物語なのである。これらの悲劇は、多忙で複雑な現代社会に生きる我々に、人間の基本的な感情をしばし取り戻させてくれるに違いない。



写真2 稽古のための模範演奏中のハル師匠(九十五歳)
(1995.5 胎内やすらぎの家で)

3 瞽女唄の魅力

瞽女唄といっても若い世代の人々はほとんど知らない。たとえ瞽女を知っていたとしても、瞽女たちが歌った唄についての関心は低い。そもそも瞽女のイメージがなんとなく陰気で暗いものという印象を与えているふしがあるから、唄への関心の低さはなおさらであろう。ところで、そのような瞽女のイメージはどうして作られたのだろうか。

瞽女を知る年配の人々にとっては、門付けを単なる物乞いとして見たことや、また盲人であるための貧相な旅姿などからそうしたイメージが作られたものだろうし、昔の瞽女を知らない世代の人々は、最後まで残って高齢となった老女の姿が大きな要因となっているのではないか。杉本キクイ、小林

ハル、そのほか写真で見る瞽女たちは皆お婆さんであることから、いつのまにか瞽女のイメージは盲老女のごとくなくなってしまった。

しかし当たり前の話だが、昔は彼女たちにも妙齡な時代があったのである。過日、高田図書館で開かれた「瞽女ゆかりの三人展」でお会いした市川信夫氏は、昭和初期の妙音講とおぼしき高田瞽女仲間の古い写真を指さしながら、この中の若い瞽女たちが化粧をして座敷に出た時、村の男衆はきっと心を躍らせたに違いないと話してくれたが、今日定着した瞽女のイメージからは想像もつかない姿がそこにはあった。

さて、瞽女そのもののイメージがこのようなものであるからには、彼女たちが歌った唄や物語に対しても決して良い印象は生まれまいだろう。ましてや文句は文語調ときているから、何やらわけの分からない古い文句を並べ立てているぐらいに思われるのも仕方がない。しかし掛け値なしで繰り返す言うが、瞽女たちは実に面白い唄の数々を伝承してきた。芸能民が、芸をもって人々を楽しませる術を持たなかったら、彼らは決して人々に受け入れられることはなかっただろう。江戸時代の藩主たちの盲人保護政策があったにしろ、また前述のような民俗的観念が巡業の基盤としてあったにしろ、瞽女たちが芸能民として生きて行くためには、その上に人々が求める芸がなければならぬ。そのことは瞽女たち自身がよく自覚していた。

例えば、始めに述べた『万歳』。男性芸能民の祝福芸である万歳は日本各地に広がっているが、女性の万歳は珍しい。これは、鼓の代わりに三味線を伴奏楽器とし、太夫役の荘重な文句の間に、道化方の才蔵役がまったく関係のない軽妙なシャレを中心とするおどけた文句を挟んでゆく祝福と笑いの芸である。あるいはまた、高田瞽女の『咄松坂』——これは小咄風的笑話である。このほか楽しい文句を織り込んだ唄が幾つかある。

これらは、その場に集う人々の座を盛り上げる唄である。上手下手はまず置いて、瞽女たちはわけの分からない唄をただ闇雲に歌っていたのではない。喜んでくれる相手あつての瞽女唄だった。小林ハルさんは言う、何よりもまず唄の文句が聞き取れるように歌わなくてはならない、と。瞽女たち自身がそれを一番良く知っていたことを示す言葉であろう。この点は、ほかの民俗芸能に比べて瞽女唄の特徴ともいえる。すなわち神楽等をはじめ奉納するために演じられる民俗芸能が多い中で、瞽女唄は、本来持っていた宗教性以上に、世俗の人間たちへの娯楽の提供という要素が強かったのである。瞽女たちにとって瞽女唄は生業だった。芸によって報酬を得ることが、瞽女唄を素人の民俗芸能ではない、訓練されたプロの芸として育ててきたのである。

なお、瞽女唄の魅力については、さらに口説や段物など物語唄の面白さについても説くべきだが、詳しくは別途作品解説にゆずることとする。ただ、ひとこと触れておきたいことは、これらの物語唄が総じて悲劇的であるために暗いという否定的な印象を与えている点についてである。

悲しい内容の物語が、哀調を帯びた三味線にのせて歌われ

るために、瞽女の口説や段物がいっそう暗く感じられることは事実である。しかし悲劇そのものについて考えてみるならば、これは文学の立派な分野であり、悲劇を持たない文学は世界にありえない。古代ギリシャの昔から悲劇は人々に感動を与えてきたし、一般的に悲劇は喜劇よりもはるかに深く人の心を動かすものである。瞽女唄の、ある段物の始まりに、「ものの哀れをたずぬるに」とある。ものの哀れを知る心、すなわち物事に感じてしみじみと人の世の哀れを想うことのできる心は、現実には起きている悲惨な出来事に対して、被害者の身になって悲しむことのできる心であろう。そして、悲劇的な物語に接することで、日々の生活では気付かない、生きていることの実感、または充実感を我々は得ることができる。しかも、その場の聴衆みんなが物語に涙することは、個々に分断された孤独な現代人にとって、多くの人々とともに生きているということの実感を取り戻す、こよなき手段ともなるはずである。

4 伝承への取り組み

さて、このように意義の有る瞽女唄ではあるが、本物の瞽女たちが廃業して久しい今日、一般の伝承者の育成にはかなりの困難がある。女の芸であった瞽女唄は、今後とも女性が伝承して行くのが自然であろう。この十年来、私が待ち望んできたのは、これに意欲的に取り組んでくれる県内の女性の出現であった。すでに小林ハルさんの弟子として演奏活動をしている東京在住の竹下玲子さんがいる。十年来、私もこの方を貴重な伝承者として微力ながら支援するとともに、その演奏会の度毎に地元の伝承者の名乗り出を期待してきた。また数年前、「瞽女唄ネットワーク」の創立に参加したのも、長年の夢がかなえられると思ったからである。しかし、思いどおりには行かないものである。

そんな中で、胎内の盲老人ホームで静かに余生を送っているも瞽女たちのことも、すでに過去の人々だと思っていたのだが、そのうちの一人、九十歳を越えてなお張りの有る声で歌う小林ハルさんの姿を見たとき、越後の瞽女唄はまだ消えていない、と私は感激した。——そうだ、ここに本物がいるのを忘れていた。しかし、あと何年健在で歌い続けることができるか知れない。伝承者を直接もと瞽女だった女性から生み出す、これが最後の機会だろう、と強く感じたのは今から二年前のことである。切羽つまって周りに声を掛けたところ、幸いふたりの女性がこれに応じて熱心に胎内に通い始めた。そのうちの一人が、このたび黒埼の瞽女宿再現に出演してくれた萱森直子さんである。

萱森さんは現在、県北の黒川村胎内やすらぎの家に通って小林ハルさんに師事し、鋭意長岡系瞽女唄の修得に取り組んでいる。彼女の並々ならぬ努力と熱意は、稽古を重ねるにつれて深まる瞽女唄への愛着と、高齢にもかかわらず熱心に指導してくれる師の人柄に対する感銘とによっていっそう強まっている。ハル師匠の熱心な指導を見るたび、厳しい瞽女の人生を生き抜いてきながら、人を思いやるその心根の温か

さに敬服するとともに、みずからの芸の新しい伝承者の誕生を人生の最後の最後まで待っていたかのような思いにははとられることがある。高齢ゆえになかなか思うように行かないことも多く、師匠は溜め息交じりに、もう二十年若ければと残念がることしばしばであるが、現在、師匠も弟子も瞽女唄をなかだちとして幸せな時を過ごしていると私は感じている。

瞽女たちの育んできた芸を本当に身につけることは、そうそう容易なことではない。伝承者にも日々の生活があり、その人の素質の問題も大きい。しかしながら、小林ハル師匠が弟子入りを快諾してくれたことは、何よりも大きな難関の突破であった。今では耳も遠くなり、手の力も次第に衰え、文句の記憶にもあいまいなところがある。しかし、機会は今しかない。それを思えば、すでに二年間通い続けた事実には、千鈞の重みがある。

それにつけても、瞽女唄の遅すぎた伝承にあたって特記すべきは、新発田市の故佐久間惇一氏の残した業績である。今から二十三年前、佐久間氏は森田国昭・橋本節子両氏らとともに新発田市教育委員会の委嘱を受けて阿賀北瞽女伝承瞽女唄の全曲録音事業を行なった。ハル師匠が七十歳を越えたばかりの頃である。このたびの取り組みにあたって、これが大きな助けとなった。



写真3 慰問演奏で共演する師弟
(1995.8 胎内やすらぎの家で)

5 結 び

江戸時代には日本各地にいた瞽女たちも、近代になると急速にその姿を消していった。そうしたなかで組織的なまとまりの強かった越後の瞽女だけが最後まで残った。また、その瞽女唄については、歌謡史のなかで果たした役割や三味線音楽に与えた影響などが説かれている。しかし、そうした意味において貴重な遺産だからこれを残さなければならないというのではない。これまで述べてきたように、瞽女唄そのものに今なお魅力があるから残そうというのである。

越後の瞽女唄にも大きく分けて長岡系と高田系があり、それぞれに特徴と味わいがある。新しい伝承者がいま主に取り組んでいるのは長岡系の唄であるが、近い将来高田系の唄も修得する予定である。本会の皆さんからもご助言をいただければ嬉しい。